



■主な内容

第45回海外交流会「世界遺産ベトナムホイアンのまち並み保存と生活の変化」報告
 IAWA アドバイザー会議報告 設立25周年を迎えるIAWA
 小林純子さんエイボン女性大賞受賞
 魅力的なりノバージョン No.3 新宿西口思い出横丁のトイレ
 ASFA組活動報告 トイレ界隈の壁面ART化完成
 災害復興見守りチーム活動報告 第4回初釜 in 法末 at やまびこ
 世田谷区民会館・区庁舎に向けたシンポジウム報告
 会員の本『提言！仮設市街地―大地震に備えて―』
 役員会報告



AVON 女性大賞授賞式
 左が大賞受賞の小林純子さん、右が指名寄付団体代表として出席した小川会長
 (写真提供 小林純子)

第45回海外交流会報告 45th International Exchange Lecture

ベトナムの住まい方の作法

「世界遺産ベトナムホイアンのまち並み保存と生活の変化」を開いて

安武敦子 YASUTAKE Atsuko

箸・米・大乘仏教の国、たくさんあるように実は少ない。ベトナムと日本はそんな共通点を持つ―という話から講演は始まった。近年の日越の交流はビジネスの他、世界遺産に関わる調査や復元に日本の大学が関わっている。フエは早稲田大学、ミソンは日本大学、ホイアンは昭和女子大学。篠崎先生はホイアンに JICA 派遣専門家として1995年から半年滞在し、以降も復元改修指導や建築申請のチェック、街並み整備方針へのアドバイス、実態調査等を行っている。



篠崎正彦 講師
 (写真 井出幸子)

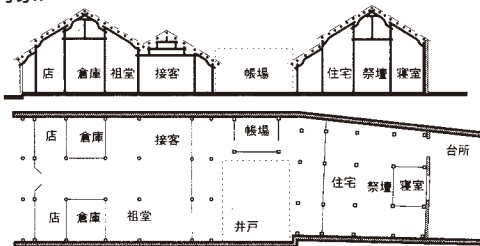
<ホイアンの町の構成>

ホイアンはベトナム中央の南シナ海の海岸にある町で、沖合にチャム島という島がありそれが航海上の目印となるため16世紀、17世紀の間、東南アジアの重要な国際的貿易港として栄えた。日本の朱印船貿易の中継地でもあり、日本人町が形成されていたことが絵図に残る。

今、日本人町の痕跡はなく考古学的発掘調査が行われている。現在の街並みは中国的要素が強い。中国式寺院や廟などの木造建築が残る。町の骨格の風水に基づき、港から垂直方向の道の突き当たりに航海の神、そこを結節点にT字路を形成し、左手に土地の神、右手に商売の神が配置される。町は堆積により浜側に拡大し、3つの通りを形成している。

<ホイアンの町家>

廟を除いては町家が中心で、ホイアンの町家は縦長の敷地の真ん中に中庭を取り、前家と後家からなる。前家



ホイアンの町家の空間構成 (昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.3 『ベトナム・ホイアンのまち並みと建築』(1996)より)

は古いものほど低く、平屋→中二階→総二階と、京都の町家と類似している。ベトナムの家屋の中庭は一つであるが、前家に壁を立てないことで道路と中庭とで通風が確保されているように見て取れた。ベトナムの中庭は環境の意味もさることながら、先祖壇や仏像が中庭を向いており、象徴的意味もあるという。家屋は、地震がないこと、水害が多いことから柱の足下は石、柱はチーク系の木材、屋根は簡素で野地板がなく雨が降れば雨が漏ることを受け入れて生活している。



中庭 (写真 安武敦子)

<領域概念と住まい方の作法>

講演のなかで私が一番驚いたのはベトナムの住宅内の領域概念である。



中庭から前家を見る (写真 安武敦子)

ホイアンと合わせてハノイの集合住宅の紹介もあった。現代的な集合住宅であっても部屋と部屋の境にドアがなく鉄格子など風を通すもので仕切る。室内の間仕切り壁に窓を付け通風を確保しているものもある。とにかくプライバシーよりも通風が重用視される。区切られたスペースを確保するという住文化ではないのだ。エドワード・ホールの本のなかでイギリス人は幼少期、兄弟は同じ部屋に住み、一人になりたいときはしゃべらない等一人になりたいというサインを出すことで、周囲も了解し、多人数のいる空間でも一人になることができるとあった。ベトナムにも住まい方の作法があるのだろう。

ホイアンで紹介された町家では、領域概念はさらに大家族に対しても緩やかだ。ベトナムは一度社会主義になっており、その際町家は分割され、複数の家族の住まいとなった。紹介された家は6家族が住み、区割りは、トタン1枚で仕切られ上は空いている、日中はカーテンが垂らしてある等、声が聞こえるのはもちろん身近に気配を感じることも許容する。

観光では知ることのできない様々な話に好奇心が刺激されればなしの会であった。

第46回海外交流会「インド圏のイスラーム建築」のお知らせ

講師：山田幸正氏(首都大学東京 大学院教授) 於：首都大学東京 南大沢キャンパス

日時：2009年3月7日(土) 見学会：13:00~14:15 <12:45集合：南門(光の塔)前> 講演会：14:30~16:30 <会場：9号館776会議室>

IAWAアドバイザー会議報告

Report from The Annual Meeting of the Board of Advisors of IAWA

設立 25 周年を迎える IAWA

松川淳子 MATSUKAWA T. Junko

1985年に、UIFAの会員で当時ヴァージニア工科大学教授だったミルカ・プリズナコフさんの提唱で設立されたIAWA (International Archive of Women in Architecture) も、来年25周年を迎えることになった。すでにこのニューズレターに、毎年1回秋に開かれるアドバイザー会議の報告を何回も書いてきたので、アーカイブの紹介について繰り返しは避けたいが、当時、女性の建築家について講義に使おうと大学のデータベースを「女性;建築」で検索したミルカさんに対し、出てきたデータは、「産院、産婦人科」などだったことがアーカイブの必要を痛感させたのだというエピソードはいつ思い出してもおもしろい。

2003年からこのアーカイブのアドバイザーを務めている私は、毎年1回10月頃、ヴァージニア工科大学のあるブラックスバーグという小さな町を訪れるのが本当に楽しみになった。UIFAのトゥールーズ大会のときは、大会プログラムに組み込んで会議が開かれたので、ルーマニア大会と重なって参加できなかった2007年を除いて、この会議にはすでに5回参加してきたことになる。夢のように美しい紅葉をみせるブラックスバーグの木々も、全米とヨーロッパ、モンゴルやパキスタンなどのアジアの国から集まるアドバイザーとも、おなじみになった。しかし、2007年4月には、この美しいキャンパスを舞台に30人以上の死者を出した痛ましい銃撃事件も起き、米国社会の複雑な面も背負っている。

2008年10月の参加時には、私はUIFA JAPONの理事会に提案し、故中原暢子名誉会長の作られた住宅作品のパネルを、アーカイブにおさめることができた。このパネルは、中



スピーチ「中原暢子の思い出」 (写真提供 松川淳子)

原先生が、2000年の「女性と建築展(女性と仕事の未来館)」に出展されたものを未来館の許可を得てコピーしたものであり、浦和の自邸、毛呂山の家、柿生の家

の3枚とプロフィールパネルの4枚である。ヴァージニア工科大学の展示室にパネルを展示し、「中原暢子の思い出」というスピーチを私がして、小さな贈呈式が執り行われた。

2010年の設立25周年にむけて、IAWAは建築界の女性のパイオニアたちをテーマにした移動展覧会を企画している。展示品のパッケージを、世界各国に巡回展示したいという意図である。UIFA JAPONでも建築学会と共同して、この受け皿をつくりたいと考えている。ぜひ皆さまのご協力をお願いしたい。



展示室のアドバイザーたち

(写真提供 松川淳子)

小林純子さんエイボン女性大賞受賞

Ms. Junko Kobayashi received the Avon Awards to Women

インタビュー：深呼吸できるトイレを目指して

会員である小林純子さんのエイボン女性大賞の受賞と、その寄付団体としての指名は、UIFA JAPONにとって2008年最高のグッドニュースだった。エイボン女性賞は、「これからの時代を的確にとらえ、社会の為に有意義な活動をし、現代を生きる女性に夢と希望を与え、功績を挙げている女性」に与えられる。30周年記念の年に、並み居る女性たちを退けて大賞に輝いた小林さんへの授賞理由は「深呼吸できるトイレを目指し、設計に打ち込んで20年。自らの現場で利用者の声やデータを収集して設計に生かし、笑顔の生まれる美しく快適なトイレ空間を実現し続けている」という、先駆性や独自性を高く評価するものである。

小林さんの設計事務所 Gondra は、後楽園近くの北野神宮、別名牛天神の境内にある。お訪ねしたのは、紅梅が香気を放っている季節。トイレとの出会いについてうかがうと、小林さんは、かつて一度、建築を辞めたときのことから話を始められた。



秋葉原「オアシス」の模型を前にした小林純子さん (写真提供 小林純子)

<設計事務所 Gondra まで>

30歳を過ぎ、夫の札幌転勤を機に建築を辞めたことがあります。建築の仕事がなくなっていた頃でした。でも、半年も経つと、建築の醍醐味が思ひだされ、皆とともに闘いながら、思いがけないものを生み出す、自分も思いがけない変化をしているという建築の仕事が自分は本当に好きなのだということが気づいたので。

札幌でも、仙台に転勤になった時も、いい事務所に出会い仕込まれました。中でも針生承一氏の「竣工後の弁解はするな」という教えが心に残ります。子育てをしながら建築と取り組んだ、吸収する時間であると自覚もしていた時期でした。

東京に戻り、子どもが6年生になってから独立を決断。40歳台の半ばのことです。「Gondra」は、かつて同期生たちとつくっていた設計集団の名(乗り合い舟の意)を継承したものです。

<トイレとの出会いと広がり>

独立と前後して、瀬戸大橋完成による来客を見込んだ、5億円をかけた夢のトイレ「チャームステーション」(図1)づくりに参加する機会を得ました。女性スタッフが求められたのです。トイレは面白いと確信しましたが、それを専門の仕事としていくイメージは持てませんでした。アメニティという概念が伝えられ、トイレにも関心が持たれ始めた頃ですが、それでも、先

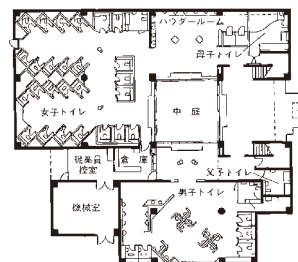


図1 チャームステーション (1989)

設計/一樹設計企画(担当:小林純子)
「母子トイレ」「父子トイレ」や身障者トイレを備えている。今では「多目的トイレ」等として珍しくなくなったところに、このトイレの先見の明がある。男子小便器の風車型配置など今見ても斬新。(図面提供 小林純子、キャプション 石川和代)



写真1:長崎県諫早市森山町 通学路トイレ (2002)

竣工写真。衝立壁の高さや配置が隠しつつ気配を感じさせる。ホッと用を足すことができ、なおかつ死角を作らないよう配慮することで安全・安心を確保している。(写真提供 小林純子、キャプション 石川和代)

見の明ある男性たちのトップダウンでなければ、実現しない時代でした。幸い次々に仕事が入り、2階分のみプレゼンテーションが理解を得て、12階分全部のトイレの仕事に広がったこともありました。

＜忘れられない経験＞

日本トイレ協会の海外見学ツアーに参加したりしながら、公衆トイレのあり方についてはずっと考えていました。まず、イメージを変えることが課題で、場所ごとの特徴をとらえて計画していたのですが、東村山の分棟型の公園トイレは多くの課題を突き付けられたプロジェクトでした。完成したときには市民とカーレーパーティを開いたりして、開放的な、親しまれるトイレを目指したのですが、趣旨が逆利用され、汚され、破壊されたのです。様々な要求が相矛盾するトイレ設計の難しさを初めて現実を知ることになりました。

そのトイレに何が求められるかを追究すること、快適さが持続できるデザインとメンテナンスはその後の大きな課題となりました。

＜“育ての親”を育てる＞

建築家がトイレの“生みの親”なら、使う人に“育ての親”になってもらうことが大切と考えようになりました。使う人と一緒に考え、一緒につくると、もっと効果的です。諫早の通学路のトイレ(写真1、2)もそのひとつです。1時間も歩いて通う子どもたちのための依頼でした。親たちの一番の心配は安全の問題でしたから、周りから目が届く、開放的なデザインにして、タイルの絵は子どもたちが描きました。今も、月1回、おとなと子どもが一緒になって清掃をしています。

湘南ステーションビルでは、女子社員がトイレ管理の一部を担当する“ワンダフルクラブ”がつくられており、計画に多くのアイデアが出され、その後、3ヶ月に1回のメンテナンス会議を続けています。

＜清掃員はクリエーター＞

トイレの利用のされ方の生の情報を持っている清掃員の話はとても重要です。人間の生の姿、無防備な裏の姿がさらけ出されるトイレが、誰にとっても重要な場所であることを改めて教えられるからです。学校で、職場で、まちの中で、ひとりではほとんどできる場所の意味は大きく、そのような視点に立ってデザインしたのが、秋葉原有料公衆トイレのオアシス(図2)です。

＜設計の方法＞

徹底した観察、インタビュー調査、利用者の統計、さらに利用者の参加などでニーズを把握してデザインする方法を評価して下さいますが、そのような方法は、住宅を設計するときと同じです。生活する立場で考えるという姿勢や方法は、トイレに出会う前から、住居学科卒業以来、あるいは在学中から蓄積さ



写真2: 森山町 子供たちとアートワーク
子どもたちに親しんで大切に使うよう、工事中にアートワークと一緒に。一寸誇らしげで楽しそうな笑顔の子供たちと大人たちが、このトイレの「育ての親」。
(写真提供 小林純子、キャプション 石川和代)



図2 オアシス@Akiba (2006)
千代田区が有人で有料、案内所や喫煙コーナーを併設し、従来のトイレのイメージを変えようとしたのが国初の試み。広々とした個室や通路で女性でも入りやすく「また使おう」と思わせる設計は流石。SUICAで支払えるのも便利。
(図面提供 小林純子、キャプション 石川和代)



図3 新宿西口思い出横丁と改修後のトイレ(2007)
男女入口の方向を分けた。通路の壁は黒いアルミスバンドレルで、黒板のイメージ。落着き防止にもなっている。(トイレ図面提供 小林純子、レイアウト 井出幸子)

魅力的なリノベーション No.3

Attractive Renovations N.3

新宿西口思い出横丁のトイレ

井出幸子 IDE Sachiko



トイレへの通路入口で広報の取材陣と小林さん
(写真 井出幸子)

トイレへの細い通路は、店への別ルートだったり、アメーバ状に繋がる裏路地のふくらみを、たまたまトイレにしたという、計画して作れる代物でない空間。夜9時、にぎやかで、客が頻りに行き交う。そんな

トイレの、男性が用を足している横で、小林さんの説明を受けたり写真を撮ったり、客たちは何とも不思議な顔をしながらも、楽しげにすり抜けてゆく。かつて、女性にとっては尻込みする凄惨なトイレ、男性にとっては、このままほっといてくれと聖域のごとく言い放つトイレ、どこか畏怖感がありこの横丁の性格を象徴してきたトイレである。そのトイレが、2007年、小林さんの手により、男女双方にとって、ちょっとどきっとする「ちょい悪空間」として再生した。好奇心旺盛な我が編集スタッフが、小林さんとともに、この西口商店街世話役の「寿司辰」店主村上さんからお話を伺った。小林さんへの要望は「キレイすぎず」、「汚れたらすぐキレイに出来るメンテナンス性」、そして、「昭和の懐かしさを大切に」だった。女性従業員の要望からの改修計画だが、彼女たちは世話役の意に反して、立地性から洋便器・ウォッシュレット・パウダーコーナー不要と断言。水道代は7~8万/月かかるが、近傍唯一の公衆便所であるにもかかわらず、私有地にあるため補助の対象としてもらえず、自販機の上がりでもまかなっている。店舗の過半が世代交代で継承者が居ないこと。再開発の話は、昨年準備組合まで行ったが、本組合の成立要件がそろわず中断していることなどを伺った。このトイレ改修で、確実に客筋が移り、この街を微妙に変質させつつある。小林さんは、都市の中で、トイレの見直しとその効果に、今とても興味があるという。また、ついにしがしろにされ、数が減りつつある男性トイレのブースが、ナーバスな男性にとって貴重な空間らしいと注視している。小林さんは、トイレを介して、街中での人々の在りようや、男女それぞれの感性を、ドラマを作るように大切にやり続けている。そんな姿をこの横丁のトイレにも感じた。

れてきたものかもしれません。

＜UIFAへの期待＞

指名寄付団体としてUIFA JAPONを選ばせていただいたのは、こんな風にトイレの仕事をしてこられたきっかけとして、自分が女性建築家であったことが有利に働いたと思うからです。男性と同等も勿論ありますが、男性の見えないテーマもまだまだありそうです。

＜今後のこと＞

これからは、今からお世話になるであろう病院のトイレのデザインや、まちづくりの中で地域ごとの特徴を読み取って、公共トイレをトータルに計画していくことをやっていきたいと思っています。
(文責 在塚礼子)

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

発行 2009年2月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083

PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866

■ ASFA組活動報告 ASFA Team Activities

トイレ界隈の壁面ART化完成

「トイレへ行くのがいやではなくなった」

中野晶子 NAKANO Akiko

1月6日に、横浜市立美しが丘中学校で、16カ所のトイレ界隈の壁面に「成長して行く樹」をテーマにした壁画が完成しました。耐震補強、アスベスト除去工事に伴う全面改装引き渡し後、私達が木の幹を描き、生徒達が切り抜いた約600枚の手のひらサイズの葉を貼って行きました。完成後美術部顧問の鈴木麻衣先生がお便りをくださいました。

(先生からのお便り)

我が校の美術部は「オタクの集まり」と思われていて、生徒も部活中はパワフルでにぎやかなものの、ひとたびクラスへ帰れば、目立たずおとなしい子が多く、文科系の部活動の中での扱いはかなり低いものでした。そんな中、今回の「学校のトイレデザインのお手伝いをする。」という活動は、みんなが使う場所を「代表して」制作できる、ということもあり、彼女たちにとって、大変誇らしいことだったようでした。

このような機会を与えてくださったこと、アートへの敷居が、なんとなく彼女たちにとって低くなったことなど、大変感謝しております。木が生長していく、という素敵なデザインを考えてくださったこと、また、無償でたくさんの時間を費やしてくださったことなど、本当にありがとうございました。



写真は下から1階～4階、入り口壁面の彩色は男子は群青色、女子は葡萄色。白い幹と白色系カッティングシート11色で葉を表現。デザイン：楊英美 (写真 中野晶子)

■ 会員の本 Member's Publication

提言！仮設市街地 一大地震に備えて－

仮設市街地研究会著 (執筆者メンバー 松川淳子) 学芸出版

本書は、災害発生後の被災者たちの復興の基盤となるため、仮設住宅が重要であるという考えから書かれている。しかも個々の仮設住宅単体だけでなく、「まち」としての仮設市街地としてとらえられている。やがて壊す運命にあり軽視されがちな仮設住宅だが、「まち」のあり方によりコミュニティー形成の面も含め、将来の結果が変わることを検証しているのである。いろいろな事例から、減災につながる手法が浮かび上がる。(須永優子)



■ 災害復興見守りチーム活動報告

Disaster Support Team Activities

第4回初釜 in 法末 at やまびこ 2009/1/12

渡邊喜代美 WATANABE Kiyomi

雪が比較的少ない法末の初釜は、落ち着いた雰囲気が始まった。「さいの神」について慣例の「初釜」といった趣。UIFA13名、客50名の余。控え室の会話も弾んで大変喜ばれた。今年の掛け軸は、亭主小川会長の墨絵、松に竹。お花に梅が入ってシックにきまった。



お点前をする小川会長

(写真 渡邊喜代美)

■ 会員の活動 Member's Report

世田谷区民会館・区庁舎の存続に向けたシンポジウム報告

在塚礼子 ARIZUKA Reiko



右に区民会館、左に庁舎。ピロティをくり「前面道路から広場、そして後ろの道路へと人々のスペースは連なっている。」 (写真 在塚礼子)

広場を持つ先駆的な庁舎建築として知られる世田谷区庁舎(設計:前川國男)が、老朽化と狭隘を理由に建替えのプログラムに載せられている。なぜ日本では建築を使い続けることができないのか。「半世紀を迎えた世田谷区民会館+区役所庁舎」と題するシンポジウムのPart2が昨年12月21日、当の区民会館で開催された。林望氏が「時が磨くもの」と題してイギリスの状況を語り、松隈洋氏が前川が都市のコアを実現した一連の作品群に世田谷区庁舎を位置づけ、主催者の建築家協会世田谷地域会は区の報告書に反論して修復の可能性を説き、続くパネルディスカッションには野沢正光氏の司会に林泰義氏と小林正美氏が加わり、都市の文化を形成する地域資源としてのこの区庁舎の意義を再認識させてくれた。200人近い参加者を得たが、半分は建築関係者。発足した「世田谷区本庁舎等整備協議会」の内外で将来を見据えた世田谷らしい区庁舎像を論じ、その像を多くの区民と共に共有していきたい。5月にはPart3が開催される予定である。

■ 役員会報告

第7回11月12日(2008年) 災害見守りチームのオープンガーデン事業実施の報告。会報77号のスケジュール及び78号の企画について報告。増ページの発行予算、ルーマニア報告書の進捗について報告。第45回海外交流の会の準備確認、第46回海外交流の会の企画、安田楠雄邸見学実施後の報告がされた。ASFA組の活動予定について報告文書提出。IAWAの参加報告及び2010年に25周年を迎えるにあたり年記念事業の協力について報告がされた。

第8回12月15日(2008年) 2008年度中間決算の報告。会報の77号の発送及び78号の進捗状況について報告。ルーマニアの報告書の作業について協議。第45回海外交流の会の結果及び第46回海外交流の会を2009年3月7日、山田幸正教授を講師に首都大学東京において実施予定と報告。IAWA25周年記念事業について検討する。会員小林純子氏がエイボン女性大賞を授賞。式の模様について報告があった。

第9回1月22日(2009年) 3月末決算のための対応の報告。会報78号及びルーマニアの報告書について予定報告。報告書の費用について協議。第46回海外交流の会の進捗状況について報告。情報としてASFA組が参加したプロジェクトについての成果報告、法末の事業として2月21日実施の講演会、世界の建築スクール展の告知があった。

■ 編集後記

小林氏のしなやかな存在感は、牛天神の梅の香にも似て。(須永) 節目にたちどまり、考え、大学時代に身につけた設計手法でもって、今有るように進めたのかな、と、小林さん(井出)小林さんのお会いするごとに素敵になっていかれる理由、少しわかりました(在塚) 不安をおおる不安な世の中! さて! UIFA JAPONの皆さま底力を発揮しよう! (渡邊) 水面の波紋をなめる泳法で、動きはじめて「えら呼吸」の記憶をたどる(中野) 駆け出し編集委員の助走段階は先輩と。ニュースレターの内容と共に優秀な先輩に圧倒されました(飯田) タイトルの英訳併記はできることから、ということで今号は紙行版です(石川)